

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

——「編成資源」を手がかりに——

城所 章子*・酒井 朗**

はじめに

本稿の目的は、近年の高校教育改革の中で看過されがちな夜間定時制高校を取り上げ、そこに通う生徒たちが、それまで担わされてきた自己の定義をいかにして再定義していくのかを解明するとともに、その過程に寄与する定時制高校の教育的意義を社会的に再考することにある。

定時制高校（以下、定時制）は戦後、教育の機会均等を基本理念に勤労青少年を主たる対象として発足した。とりわけ都市部の夜間定時制は社会的地位上昇への期待を生徒に抱かせる装置（片岡 1993）でもあり、勤労青少年の学習意欲がきわめて旺盛な時期のあったことがいくつかの先行研究で報告されている。定時制は「高校進学機会の社会的経済的不平等や地理的不平等を是正するという大きな意義」（片岡 1983, p. 158）を果たし、高校教育の普遍化に大きく貢献した。だが、こうした定時制の果たした歴史的意義は認められながらも、今日定時制は縮小傾向にあり、「新しいタイプの高校」へと改編される対象とされることも多い。

こうした中で、定時制高校に関する教育社会学の研究は、そこに吸収される生徒層を高校間の格差構造における最底辺層として位置づけ、分析することに終始してきた（片岡 1982等）。従来の「教育困難校」に関する研究においては、研究対象は「改善を大いに残す矯正の対象」という構図におかれてきたが、定時制も例外ではない。「現場の課題がその場の状況に応じた人々の多様なリアリティに重層的に構成されている」（古賀 2004, p. 4）ことが重視されないまま議論されてきたのである。

*元お茶の水女子大学大学院 **お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター

また、90年代以降は「新しいタイプの高校」が注目される中で、定時制は対象として取り上げられることすら少なくなっている。

だが、定時制は働きながら学ぶことを前提として編成され、年齢やキャリアの点でも多様な層の生徒を抱えるきわめてユニークな公的教育機関である。それが今日どのような実態にあり、青年期を対象とする教育機関としてどのような役割を果たしているのかを社会学的な観点から究明することは、きわめて重要な課題であろう。

そのような観点からの考察は、定時制を階層構造の底辺としてのみ位置づけるのでは見えてこない様々な側面を浮かび上がらせるに違いなく、また定時制を減らして「新しいタイプの高校」に転換していこうとする今日の教育改革のあり方にも再考を迫ることになると思われる。さらに、縮小や改編の対象とされる定時制への着目は、今日の高校教育のもつ構造や日本社会が内包する特性を逆照射するとも考えられる。

以上のような問題関心から、本稿では、ある夜間定時制高校を対象とした長期にわたるフィールドワークとインタビューをもとに、その内実を捉え、そこでの生徒の成長過程とその要因を描きだすことを試みる。

1. 先行研究の検討及び本稿の課題と方法

1.1. 先行研究の検討

まず、先行研究を検討し、本稿の課題と分析枠組みを設定する。

高校研究では周知の通り、学校間の格差構造に着目した分析がなされてきた。たとえば藤田（1980）はトラッキングシステムとして生徒の進路選択の機会と範囲が制約される水路づけを高校教育の特質として指摘した。また、苅谷（1986）は日本の高校格差構造は「自己選抜」とも呼ぶべき「主観的過程」を随伴させていることを見いだした。90年代になると、日本社会の階層性を正当化する日本型メリトクラシーのイデオロギー性を暴く実証研究がなされ（苅谷 1995）、人々に不平等構造を正当なものとして受け入れさせる社会心理的な意識が説明されてきた。

だが、かつてローレン（Rohlen 訳書、1988）は、日本の高校には個人が取り組むべき自立の視点がないことを指摘したが、研究の上でも日本では階層、選抜の問題が過度に着目され、個人の主観的な達成として、いかに生徒が学校や社会に適応し、自立を遂げるのかはほとんど着目されてこなかったのである。このことに関連して、志水（2004）は公立学校が果たす中心的役割を「学力の保障」と「市民性の育成」としているが、「学力低下論」については、近年、実証的に検討されているものの、

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

もう1つの軸であるとされる「市民性の育成」がいかに達成されているかは十分に検討がなされてきたとはいえない。

今日、教育全体が多様化し、様々な教育改革が提議されている。その背景には、1970年代以降、高校教育の量的拡大に伴う不本意入学者や退学者の存在がある。90年代、こうした者たちは生徒文化の関連から検討され、生活世界全体における学校生活の比重が低下する一方で、学校外、とりわけ消費文化に接近する高校生像の現れとして説明されてきた。だが、そうした脱学校的な層の生徒が、再び学校や社会にコミットしていくには、どのような手だてを講じればいいのか。この問いに答えるには、実際にコミットしていくプロセスの記述と、その要因の解明がなされる必要がある。現状に即した教育改革は、政策の対象となる当事者の視点からみた固有の現実や課題が理解されなければ、みえてこないからである。

一方、方法論の議論では、教育過程が看過されてきたことが批判され、いわゆるスループット分析が強調された。だが、この内部過程への着目という提案に対して竹内(1995a, p. 4)は生徒が学校を「通過した以上、生徒を変化(知識, 技術, 価値, 態度)させた原因は学校(箱)の中にあるはずだという思考に囚われすぎ」だと批判し、教育の隠れた効果を明示化するために学校チャーターの優位性を唱えた。竹内によれば、相互作用主義あるいはエスノメソドロジエ的学校研究は教室や学校というミクロな状況における成員の相互作用や構想によって現実が「間主観性によって構成されることを強調するあまり、ミクロな状況を取り巻く制度的定義の効果」が考慮されていないという。チャーター理論は従来の社会化モデルと配分モデルの二項対立を解消し、教育システムを制度的ルールの構成システムとみなす教育の隠れた効果を明示化する重要な知見だといえる。

しかしながら、この理論においては各学校に属する生徒集団は一括りに把握されるという問題がある。ミクロな社会の所属集団は集合単位として単一集団とみなされてしまい、かえって「行為者」の視点を欠落させてしまっている。生徒は学校チャーターを受動的に引き受ける存在として捉えられ、積極的に選択行為する主体としての能動性が考慮されていない。この点に関連して森田(2004, p. 8)は欧米の研究動向をレビューし「社会的秩序と支配的文化の再生産のみを強調した批判理論(critical theory)は人間を受動的な弱者としかしていない点がすでに指摘され、修正的な抵抗理論(resistance theory)の登場」を指摘している。抵抗理論の祖とされるウィリス(Willis 訳書, 1985)のいう「野郎ども」がそのまま体制を再生産するのではなく、彼らなりの能動性を持って自分達なりの位置や行動を主体的に獲得し

ていくと指摘されてきたように、眼前の選択プロセスへの行為者の主観的な意味付与への着目が必要とされるのである。森田は、この理論的前提に基づいて人間に備わる能動的な順応性を重視し、「外的な権力構造と内的な心理的葛藤の相関性からマイノリティーの対処行動を把握する複眼的見地」の検討を提唱し、その視点を「ニューカマー」研究に導入した。同様に宮島（1999, p. 11）も「社会的な場におかれた行為者達の実践は相対的な自律的次元をもつもの」と捉えるべきだと指摘し、従来の研究が個人の主体的行動や選択を要因として位置づける視点を欠如させてきたと指摘した。つまり、主体の行為、役割を構造の特定の要素に還元して論じられることによって、内側からの理解がこれまで十分にされてこなかったといえる。

1.2. 本稿の課題と分析方法

以上の反省をふまえて本稿では、夜間定時制生徒の学校内外の体験を通じて彼らが自己を再定義していくメカニズムを明らかにする。彼らはすでに中学生の頃から、脱学校的あるいは反学校的な生徒として捉えられ、学校からきわめて低い評価を受けてきた層である。また、定時制への進学が決まった段階で、高校階層構造の最底辺という学校チャーターを重く背負わされた者たちである。本稿で言う自己の再定義過程とは、外部から与えられた自己の定義を、入学後の実際の夜間定時制高校が提供する学習と生活の環境において生徒たちが再定義していく過程を指す。その過程とはいかなるもので、そこにはどのような要因が作用しているだろうか。

このような問題関心に立つ本稿の分析のために有効だと思われるのは、ウォルマン（Wallman 訳書, 1984）の「編成資源（organizing resources）」の概念である。彼女は古典的な経済学の概念である、土地、労働力、資本といった「構造的資源（Structural resources）」は社会の中で不平等に配分されているのに対し、万人が利用できる「編成資源」なるものがあり、それをいかに利用するかにより生活のあり様が大きく変わることに着目した。

近年、この理論を援用することによって、「ニューカマー」や「フリーター」の研究においても家族や個人の行動様式が分析されている。「ニューカマー」研究においては、宮島（1999）が「資本としての家族」を定式化し、志水・清水（2001）が家族システムの再構成を説明した。志水・清水（2001）はニューカマーの家族が日本での生活をいかに組織化するかを説明する際、ウォルマンが捉えようとした「編成資源」の「資本化」まで視野に入れたレベルで把握を試みた。また、新谷（2002）も「高卒無業者」、「フリーター」研究において、フリーターであることに適合的な

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

非移動志向の下位文化を「地元つながり文化」とし、その共同的关系の成立を「編成資源」の利用の観点から説明した。

こうした「編成資源」の概念を援用することは、ある学校に属する生徒集団を1つの単位としてア prioriに措定してきた先行研究に対する批判となる。ウィリスなどの抵抗理論が繰り返し指摘してきたように、個々の主体はそれぞれが置かれた文脈において、同時に他の様々な諸要因に囲まれる中で、不断に自己を構成する可変的な意識と態度を持つ主体である。この概念を援用することによって、学校というミクロ社会において、そこに帰属する個々人はそこでの利用可能な資源にアクセス、選択しながら生活を成り立たせると捉えることができる。

1.3. 調査対象とデータ収集方法

調査対象校であるX高校は東海地方に位置する公立夜間定時制で、1クラス40名、各学年2クラスから構成される学年制を基盤とした男女共学校である。1988年の学校教育法改定を受けて、通信制の併習等を通じての単位習得によって選択的に3年卒業制も導入している。全国的に夜間定時制高校が入学者の減少を理由に統廃合あるいは「新しいタイプの高校」への変革対象とされる傾向にある中で、X高校はここ数年間、二次募集がほぼ毎年行われながらも、量的には安定した入学者を維持している。二次募集は4月初旬であるが、これはこの地域における他の全日制の入学試験及び二次募集の全日程の終了後であり、すなわち、その年度における高校入学希望者にとっての最後の入学機会であることを意味する。学年、クラスによって男女比、年齢層は様々なものとなっているが、10代から20代前半の者が占める割合が高いのが最近の傾向である。また、人数の変化はあるものの、毎年日系ブラジル人を初めとするニューカマーの生徒たちも入学してくる。X高校における入学者全体の内、卒業に至るまでには3～4割の生徒が途中で退学していくのが実情である。また、最近の進路実績をみると、3年卒業、4年卒業のそれぞれの時点で、各クラス1、2名程度が推薦入試を利用して四大へ、さらに、同数程度が短大、専門学校へ進学し、過半数はアルバイトを含め、各種の仕事に従事していく。ただし、全日制とちがいで、入学してくる生徒層が毎年一定にはならないので、年度によってはこの限りではない。実績関係の上に成立する指定校推薦による進学、就職先をX高校は有しないが、進路選択を契機に他県へ移動する生徒は極めて稀である。

本調査では学校生活と学校行事に関する参与観察と生徒へのインタビューを行っている。2003年10月から2005年3月まで参与観察に従事し、彼らの学校での学習や

生活のパターンや活動の領域を把握した。また、インタビュー⁽¹⁾は夜間定時制X高校に通う20名（男子8名，女子12名）の10代後半～20代前半の高校生対象に2004年2月から2004年6月まで行ったものである。本稿の分析は，このうち，主に生徒インタビューで得られたデータを用いているが，学校の概要などの記述においては参与観察で得られたデータも用いている。なお，X高校の生徒の語りの特徴を明らかにするために，同じ地域の全日制Y高校（3年生男子3名，女子2名），Z高校（2年生女子2名）の生徒にも同様のインタビュー調査を実施した⁽²⁾。

以下では，まず対象となった生徒たちの生活世界を概観した後に，その中で彼らが自己を再定義していく過程を記述する。それをふまえて3節では彼らが自己を再定義していく上で用いられる編成資源を整理・分析した上で，4節で高校教育改革の在り方に対して再考を促し，結論としたい。（学年はインタビュー時。以下，同様。）

2. 夜間定時制と自己の再定義過程

2.1. 夜間定時制の風景

冬であれば辺りが暗くなる頃，夜間定時制の生徒たちが学校に登校してくる。「3年卒業」のために昼間の特別授業を受講しなければ，生徒たちは夕方から授業を受ける。生徒たちは，登校後，給食室で夕食をすませ，それぞれのホームルームクラスへと向かう。X高校の挨拶は時間を問わず，「おはよう」である。X高校では普段は制服着用が義務づけられていない。そのため，生徒たちは私服で登校し，化粧やマニキュア，アクセサリなども頻繁にみられる。もっとも中には「あえて制服」を好む者もいるし，他校や職場の制服を着用してくる者もいる。また，徒歩や自転車に混じって，原付や自動車で登校してくる者もいる。一部には，過度に華やかな頭髪や服装での登校，上履きに履きかえないまま土足で校内を歩くこと，携帯電話のマナー等に対して，教師が生徒に対して指導する場面もみられたが，全日制と比較すれば，夜間定時制のほうが，いろいろな意味で自由度が高い。こうした私服での登校や在籍中でもバイクや自動車の免許取得が可能であることは，X高校の近隣の全日制高校においては例をみないことである。X高校の生徒集団は中学校卒業後ストレートに入学してくる「現役生」と，中学校卒業後数年経ってから入学してくる「過年度生」によって構成される。生徒たちによれば，「学年が下でも（相手の）年が分からない」ことも多く，外見だけでは，「微妙な年齢差が分からない」。（（ ）内は筆者注。以下同様。）

中学時代に「とりあえず起きると，学校，終わっている時間」で，「ほとんど行っ

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

ていなかった」というA（現役・女子・3年）は、夜間定時制は自分の生活スタイルに合っていると述べた。夜間定時制は夕方から始まり、それから午後9時ごろまでの4～5時間が拘束されるだけである。中学校のように「朝から夕方まで」一日校内で過ごすということはなく、一日の生活時間の組み立てのかなりの部分が個々の生徒の裁量に委ねられている。ただし、Aのように生活が昼夜逆転している者は少数で、多くの生徒は高校入学後アルバイトをするようになり、上級生ほど常態的に従事している者が多い。

2.2. 学校、社会への参入

まず、B（現役・女子・3年）を事例の中心としてとりあげ、生徒たちの自己の再定義過程と、そこにかみ合う学校と学校外の生活世界の関係性を記述していく。

Bは3年卒業を目指し必要単位を取得中であり、将来の「やりたい仕事」のために専門学校進学を希望している。進路を考えるようになったのは「最近」と語る彼女は、中3の半年間、中学校へ「全然、行っていなかった」経験を持つ。「何か、とりあえず。もう何かつまらなかった。全部。」であり、「とりあえず、どこも行きたくないし、何もしたくないって考えてた。あまり覚えてないけど。」と彼女は当時を回想している。中学時代には、現在に至るまで「しょっちゅう遊ぶ」親友もいたが、中学校の雰囲気は「息苦しくて」、「何か合わない」ものだった。「別に授業を受ける気はなかったけど、別にフツーに（教室に）入りたいと思って」登校したこともあったが、今より「もっと、もっと明るい色」の髪を学校から注意され続けても直さなかった。彼女は、当時の自分は学校から「見放されてた」存在だったと定義している。その頃は全部が「つまらなかった」が、理由は彼女自身にも「分からない」。当時の彼女にとって、高校は「行く気なかったし、もう、学校なんてどうでもよかった」。卒業式後も進路未決定であったが、「願書とか全部、親」が準備し、入試日程が最も遅いX高校を「ここしかなく」、半ば「強制的」に受験させられた。

Bは高校入学後も、毎日学校を「辞める」ことを考えていたという。だが、ある日、アルバイトを探すために求人情報を見た。この時の経験を彼女は次のように語っている。

「求人情報見ている、高卒以上って、すごくある。中卒と高卒は、全然違うと思う。だけど、それでまた、いい仕事に就こうとするとやっぱり資格がいるっていう。」

求人情報誌に触れることで初めて、Bは「社会の現実」の一端に触れたのである。

1年生の冬、Bは初めてのアルバイトを試みたが、「何で辞めたのかよく分からないけど、ある日、突然、何かもう行く気なくなっ」て辞めた。高校入学後、2つ目となる現在の職場では、多くても週に1、2回程度、アルバイトを続けている。Bによれば、髪型や服装の規定は「最近、どこも厳しい」が、自分の「ファッション」へのこだわりには「妥協できない」ため、探すのに苦労したという。彼女のアルバイト日数は他の生徒たちに比べれば少ない方だった。だがBはその経験を通じて、「学生の方が楽」で「仕事の方が大変」だと評価するようになった。

また、周囲に「いっぱい、いる」フリーターについては、「何か頑張っている人、毎日休まず、毎日行っている人、偉いなあと思うけど。フリーターって成長がないじゃん。何ていうの？ ずーっと、それをやっても、で、じゃ、最後、どうなるの？ って」考えるようになったと語る。

一方、学校内ではBよりも先に、周囲の生徒が学校を辞めていった。Bはそれを反面教師にして、次のように考えたとも語った。

「もう1年の終わりぐらいから、(辞めるのを) やめよう。ちゃんと最後までやろうって思いだして。そこからは、途中で口では“辞めたい、辞めたい”って言うけど、でも実際、心の中では絶対卒業してやるって思っているから。本気で辞めたいって思うのは、最近では全然、思わない。」

2.3. 2つの時間

C(過年度・男子・4年)もまた、仕事の方が「大変」と答えたが、むしろ彼の発言で注目すべき点は、仕事と学校の違いを時間の質的違いとして捉えていた点である。

「仕事をしてしまうといけないんだけど、仕事は返ってくるからやっている。給料があるから働けば給料があるし。30分でも働けば(給料が) あるけど、学校っていうのは別にそういうものじゃない。自分が学校来たくて高校卒業したくて来てるから。だけど、やっぱりそこらへんが同じ時間でも、何ていうのだろう。意識が違うっていうのかさあ。やっぱり給料を貰って働いているから、それはそれでいい時間だし。時間が自分の中で違うっていうか。」

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

夜間定時制高校に通うことで、高校生たちは、「被雇用者」としての「昼間の時間」と「高校生」としての「学校時間」という質的に異なる2つの時間を同時に経験することとなる。同時にそれは、夕方から学校に通う自分たちと、学校外の友人の生活の間に大きな隔たりがあることを意識させられる経験でもある。学校外の友人と夕方から遊びに行くことができなくなったり、「学校が夜だから見たいテレビが見れな」くなるのである。

一方、彼らは昼間のアルバイトの経験を通じ、「社会」に最も接近するようになる。全日制の生徒もアルバイトをしているが、彼らは多くの場合同年齢の他者と一緒にアルバイトをしている。だが、定時制の生徒たちが一緒に働くのはパートの女性や一般職員である。

このような彼ら独自の経験の仕方が端的に表れているのが、中途退学に対する彼らの解釈の仕方である。X高校の生徒たちには、中途退学とは、学校の時間がしんどくなって離れていくことだと映っている。夜間定時制での4年間には退学を考えたことが「結構あった」というD（過年度・男子・4年）は、「人それぞれ」と前置きして、個々人にとっての学校の位置づけのちがいを次のように指摘した。

「今年もそうだったけど、辞めて欲しくない人は、自分も最後まで辞めるなって言っていた。だけど、最終的には本人がさあ、本人がしんどいから。来るのも本人だし。だけど、自分たちは頑張るなら、頑張った方がいいよ、だから、本人がちょっとでもやりたいっていう気持ちがあれば、やった方がいいじゃないか、っていうのはいつも言っている。」

彼は学校外の重要な時間の存在や事情を認め、それと学校での時間や事情とのせめぎあいとして、問題が認識されていたのだった。このことは、X高校と併行して実施された全日制Y高校、Z高校での調査において、生徒たちが「退学者」を学校規範になじめない学校不適應者として理解していたのと極めて対照的であった。

2.4. 差異化されるアイデンティティ

Bの高校入学は親による「強制的」なものであり、さらに高校卒業後も進学がすすめられていることから、家族の側の進学アスピレーションは相当に高いと認められる。けれども、B自身は、高校入学後直ちに、学校に価値を見いだすことはできなかったという。だが、現状においては、Bは以下の語りにみるように、学校の価

値を必ずしも軽視しているわけではない。

「(学校生活は)何かまた違う世界がいっぱいあるとか思って。いろんなこと、やってみたいなーって、思って。何か。……視野が狭いと嫌。私は。何かいろんなことやってみたい。何か。」

彼女の周囲の「フリーター」や「学校、行ってない子」の方が彼女よりも時間的に「自由」である。だが、Bによれば、夜、学校にいるために「テレビが見れない」のが辛かったり、中学校は「何もしなくても卒業できた」のに、高校は定期考査と出席日数の制約があるので「大変」であるが、そうした辛く大変な選択を自ら行っていることを実感することによって、「自由」の意味が前とは違ってきたという。

「(自分にとって高校生活は)自由。自由っていうか、もう来たくない人は来なくていいよ、(高校を卒業することが必要だと思わない人にとって)辞めていいよって感じ。中学は別に何もしなくても卒業できるし、(自分も)卒業できたし。けど高校は何か、自分の責任でやらないといけないかなあって感じ。」

だから、「外見」は「真面目じゃないけど、中身はすごい自分でも大人になったと思う」とBは話す。

「自分の考えをまげたくないから。先生の言う事もあまり聞く気になれなかったし、その時(中学生)はね。だけどね、それじゃあねえ、今はやっていけないなあって。」

学校、職場の上下関係の存在を認める「視野の広さ」も、彼女は「大人になった」とする。こうした語られ方に表れてくるのは、過去の自己や他者を、自己の経験や価値観と対比させることで自己の再定義をする様である。そうした中で「他にやりたいことがない」退学や「成長しない」フリーターを選択する考え方を「自分にあわない」こととして退けているのであった。

一方、先に紹介したCは中学卒業後直後から仕事をしていたが、職場の人の勧めがあつて高校に入学した。そうした経験をCは、「自分の中ではかなりいいこと」と評価し、次のように述べた。

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

「やっぱりねえ、(社会を)知らないよね。中学から(すぐに)高校,来る(=入学する)人って。ホントにそう思うし。一番違うのは,中学校出て,勉強もしなかった,仕事もしなかった,フラフラフラフラしていた人が(学校とアルバイトの)両立なんて,できるわけないじゃん。はっきり,言って。」

彼のことばには,「学校」や「仕事」にコミットしない層の存在が端的に示されている。彼は高校入学後も,それ以前と同じ職場で仕事を継続していたが,徐々に仕事を任されるようになり,学校の継続が「嫌になった」ことも「結構あった」という。だが,社会を「知らない」者との差異化を図りたいとの思いが,夜間定時制を継続する動機として語られていった。

また,E(現役・女子・4年)は「やりたい放題」の中学時代とはちがひ,「学校」に行くことは「当たり前」と思えるまでに現在の自分は「変わった」と述べるとともに,次のように語った。

「フツーは(高校3年で)学校,終って,卒業してさあ,就職とかするじゃない? やっぱ。すごくみじめになるかな。何か,自分は4年だし,みたいな。それは思ったけど,最初だけだった。」

彼女は自分の置かれた状況を,彼女が言うところの「フツー」と対比させ,アイデンティティを重層的に理解しようとしている。こうした語りに着目すると,自己の再定義過程は学校の内側だけで生じるものではなく,外部との関わりの中にも広がりを持っていることが確認される。

下位ランクの高校の問題に関しては,たとえば竹内(1995b)は低位同質化する学校文化を描いた。また,門脇(1992)は進路多様校の実態を「相互悪評効果」,「相互ラベリング」論から説明した。だが,経験にもとづいて彼らの意識を追っていくと,様々な契機から,彼らはアイデンティティを差異化し,チャーターに対抗しようとしているのだった。また,自分にとっての学校について語る意識は個々人の解釈枠組みの多様性を示すと考えられる。これは本稿で取り上げた対象者以外の他の生徒にも似たようなことが見られた。つまり,彼らの学校や大人になることの意味づけは,予め用意された何らかの枠組みや解釈図式から説明されるのではなく,様々な経験を通じて,各人が見出すのであった。

3. X高生に提供される編成資源

3.1. ネットワーク内で伝達される情報

X高校は「新しいタイプの高校」にみるような、大学へのバイパスとして進学を重視する高校ではない。「1回辞めて、やりなおし」を希望する過年度生や定時制の生活スタイルが望ましいと考える者など、学力を含め、多様な生徒を受け入れる現状にある。したがって、入学そのものが「向上心」や「地位達成」を鼓舞するとは考えにくいし、学校チャーターはむしろ負の方向で作用する。

それまでは投げやりであった生徒たちが、入学後に学校や社会に再びコミットしていく語りから浮かび上がってきたのは種々の編成資源の存在である。たとえば、その1つに情報という編成資源がある。Bは中学生の頃は高校進学をせずに「働いても構わない」と思っていたが、実際に就職に関する情報を収集することも、情報が入ってくることもなかった。だが高校に上がり、アルバイトを実際にやろうとして情報誌を見ることによって初めて、彼女は「社会の現実」を知ったのである。その意味ではBが行動に移すために不足していたのは情報へのアクセスでもあったと解釈できる。

学校では、一般には授業を通じて学問的知識や進路情報などが提供される。だが、アルバイトをしたり、落第しないで進級できるようにするために、彼らには「(学校を)休んでいると、とりあえず来いとか」(F・過年度・4年・男子)、「(欠席日数が多くて)ヤバイ奴とか来てないと電話したり」(G・過年度・4年・男子)といったインフォーマルな情報が友人から提供される。アルバイトに関しても、大半の生徒にとっては「今までにない経験」であるがゆえに最初は「探し方が分からなかった」り、「フツー(=全日制)に比べて(学校の)時間がちが」ったり、「高卒以上」という雇用条件があるために、実際にアルバイトできる職場を見つけることは容易ではない。それだけに不特定多数の人に提供される「求人票」よりも、「親の知り合い」や「友達」、「中学の時の職場体験」等のインフォーマルなネットワークから得られる情報の方が貴重であり実用性が高いのである。

そして、こうしたインフォーマルなネットワークを通じて、X高校の生徒たちは他の高校との比較やアルバイトを経験するようになり、様々な価値観や行動様式に関する情報に触れて、自己の再定義へと促されいく。「いろいろな人」がいるX高校の学校生活をBが「おもしろいところ」と感じられたのは、他の高校との比較情報が得られたからである。

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

第二に、夜間定時制の場合は、偏差値で輪切りにされた全日制のような同質性の高い集団とは異なる、多様なメンバーで構成された集団の存在を指摘できる。クラスは同一年齢で構成されず、そのため「価値観」を含めて集団の多様性が非常に高い。この集団の異質性もまた、彼らが自己を再定義していく過程を支える重要な編成資源である。

ある生徒は入学時の周囲の様子を「ホント、皆、個性的」(H・現役・女子・4年)と回想する。そうした周囲の者との年齢の相違や「個性的」な人物の存在は、入学してきた生徒たちに「異質性」として強く認識され、高校入学後の「今までにない」経験として語られた。「自分よりも年下の人とやるのが、すごい違和感があった」(F・過年度・男子・4年)りもする。一般的に生徒文化研究では、特定の年齢層だけで構成された集団が前提とされ、同質的な他者との社会的相互作用の生起が想定されている。だが、それらとは異なり、夜間定時制では最初に異質性が生徒たちに提示されるのである。Bは「同じ高校だからツレ(=友人)みたいな(=みたいなことは)、あんまり好きじゃないって感じ」で、学校内の友人たちとは、「同じ高校だから」友人になったわけではないという。

「(一般的に高校生は) 同じ場所にいるからつるんでいないといけないって感じ。「同じ高校」だからとか。でも、(X高校では) そういううわべだけの付き合いする気ないから。」(B・現役・女子・4年)

「20歳でも、それ位の年齢でも仕事をしていないと言うと、何か、(ほかの20歳の人と) ちょっと考えが違う。」(H・現役・女子・4年)

そうした異質性の中から生徒たちは、独自の視点から親近感を抱く友だち関係、あるいはその対比項として心理的な距離をおく対象を見つけだしていく。Hは年上の同級生に、仕事をしていないという点で自分との近さを感じている。

第三は、前節で指摘した夜と昼の2つの時間である。夜間定時制の生徒が昼間アルバイトをする時間は「大人」と一緒に働く時間である。コンスタントに働ける昼間の職を探そうとすると、年代層が高いパート集団から構成される職場しかないことが比較的多い。そういった意味では、彼らの職場体験は全日制生徒の夕方からのアルバイト経験とは異なっている。彼らは高校生との関係の中ではなく、「大人」の世界の中で評価を受けることになる。労働や金銭の獲得が、「違うことやって、おもしろい」という感覚だけではすまない現実も知ることとなる。たとえば、時には19

歳でも、高校生というだけで、同年齢の「フツーの人」とちがって、「時給が下げられる」ことを経験したりもする。それだけに職場において「大人」に認められることは、自分の確からしさを支えるアイデンティティの拠りどころとなっているのである。

3.2. 活動の裁量権という資源

第四の編成資源は、高校入学に伴う活動の裁量権の大幅な拡大である。中学校から高校へのトランジションに伴う生徒の活動の自由度の高まり、すなわち、行動様式や活動範囲における個々の裁量権の拡大はこれまで看過されてきた点である。だが、たとえば Kinney (1993) は、ミドルスクールからハイスクールへのトランジションに伴う生徒文化の分化による新たな関係性や役割の変化が、自信の回復と自己の再定義を促しうることを示唆している。また、川野他 (1998) は短大入学が人生周期の他の時期よりも自由度が高いことに着目し、環境移行過程モデルを提示した。そこでは短大生が環境変化を共通のスケジュールに沿って体験していく一方で、自由度の高さが移行過程の個人差に結びつくとみる。

X高校の調査に併行して実施した全日制高校生へのインタビューにおいても、生徒たちは「自動販売機のジュースが飲める」、「学校帰りに寄り道ができる」、「(禁止されている) アルバイトをする」、「携帯電話の所有が親から許容される」といった日常生活での裁量権の拡大を感じていた。だが、就業やアルバイトが公的に認められていること、そのことと関連してバイクや自動車の免許取得が早期に可能であることなど、行動様式や活動範囲の裁量の度合いは、夜間定時制の生徒たちの方が全日制生徒に比べ、より拡大しているのだった。そして、この裁量権の拡大故に、彼らは昼間の時間に学校外で種々の活動に従事することができるのであった。

4. 結論

以上、ウォルマンの概念を手がかりとすることで浮かび上がったのは、生徒たちは社会制度に規定されながらも、単にそれに翻弄され、引き受けるだけの無力な存在ではなく、夜間定時制高校が提供する生活や学習の枠組みがもたらす編成資源を利用しながら、不断に自己を再定義していく可変的な意識と態度を持つ主体であるという事実である。生徒の語りを資源の取り込みプロセスとして丹念にみていくと、個々の社会環境、教育環境に対する意味付与や価値観を個人の主観を通して把握できる。

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

学校や自己に対する生徒たちの意識や態度は、それまでの学校経験や入学経緯等によってのみ規定されるものではなく、現実の相互作用を通して構築されるとみることができる。生徒たちが現在や将来を決定付ける上で重要な資源となっているのは、宮島(1999, p. 122)のいう「与えられるチャンスや自らの行為を通して築き上げていく資本」としての情報や時間、集団の異質性、そして活動の裁量権であると解釈できる。つまり、個人の意志や行動は、社会構造の規定性だけではなく、主体の選択との複雑なからみ合いの中で成立するものである。

また、本稿の分析を通じて同時に明らかになったことは、今日的な定時制高校の在り方に内在する教育的意義であった。その1つは定時制設立の意図そのものの体現といえる教育機会の提供である。夜間定時制は年齢に関わらず広く入学希望者を受け入れるだけでなく、消極的、他律的進学者への教育の提供ともなっている。そして、そうして入学してきた生徒たちに、新たな関係性や知識を学ばせる教育的機能を内在させている。2つめは定時制設立の意図とは少し離れたところに存在するものである。勤労青少年を対象に発足した定時制であるが、現代において生徒たちは高校入学後に働くことを選び取る。そこで彼らは、「大人」の労働観や学校外の世界を経験することとなり、それによって、学校の内側を再考することになる。また、夜間定時制では年齢や国籍、それまでの就学経験の異なる生徒が集まり、異質性の高い集団が構成される。それは、ある意味、現在の学校教育のテーマとされる「共生」が、作為的ではない形で具体化されているともいえる。そうした中で、夜間定時制の生徒は国籍、年齢といった属性的な部分のみならず、経験や価値観という極めて主観的な要素によって、他者を評価し、関係を結んでいくのだった。つまり、夜間定時制には、学校化社会の同一性や固定性とは異なる学校の枠組みが提供されることによって、相対的な価値へと生徒を転換させ、自己を再定義させていく可能性を潜ませていたのである。

一方で、活動の裁量権の拡大と夜と昼の2つの時間が区別されることで、生徒たちは学校的価値以外の多様な価値を認めていくことへと促されていく。この中には当然ながら、学校に積極的な意味付与をなしえない者やその結果学校から離脱していく者が出てくることも見逃すことができない。X高校における中途退学者の割合の高さは、下位校が抱えるきびしい現状を示してもいる。

だが、夜間定時制は4年間通学を原則とし、ある意味それが、「ゆっくりした教育」として自己を再定義し、将来展望のみならず、学校教育へのニーズそのものを形成する時間となり得ていることも確かだと考えられる。学校化社会の枠組みでみれば、

脱学校的あるいは反学校的な意識や態度とみなされる者も、「ゆっくりした教育」の中で、まさに自己を再定義しつつある過程にあるとも解釈できるのである。そうした者たちに対し、学校内外を共に視野に入れた教育的働きかけが考慮されていかなければならない。

X高校の教師たちも、自由度の高さが生徒にとって「緩やかさ」から「いい加減」へと変質しないよう、学校生活における規律を守るための粘り強い働きかけを行っていた。ある生徒はX高校の印象を、「(担任が)うち(=自分)のクラスだけを覚えればいいって感じ」ではなく、「全部、全体を覚えているもん。(生徒を)皆、覚えてるみたいな」と述べた。ここからも、教師が生徒全体に対して働きかけていることが伺える。また、別の生徒も教師との親密度の高い人間関係を夜間定時制特有のものとして認めていた。

今日の高校教育は、「個性化・多様化」を基本理念として改革が進行している。ここでは高校間格差の是正や人間性の涵養を目指して⁽³⁾選択権を生徒に提供することによって、興味・関心にそった高校進学やその後の進路形成を促そうとしている。「新しいタイプの高校」とは、従来の高校教育が対応できないでいる生徒の変化に対応するための改革であり、生徒の選択の幅を広げることで学校適応を高めることを意図している。

こうした教育の潮流は一見すると裁量権の拡大と言う点では夜間定時制高校と似ている。だが、「新しいタイプの高校」では「自己責任」、「自己決定」できる主体が所与のものであることを前提として教育が構想されている。しかしながら、本稿で明らかになったことは、階層構造の中でネガティブな自己定義を持たざるを得ないでいる生徒たちにとっては、様々な相互作用を通じて自己を再定義する過程が必要であり、そこから初めて彼らが主体的に「自己決定」したり、「自己責任」を担っていくことができるということである。このことから我々が学ばなければならないのは、「あるべき個人」(荻谷 2001, p. 166)の理想からスタートする議論は、学校が「人間形成」に寄与するものだという視座を欠落させているということだ。かつてローレン(Rohlen 訳書1988, p. 335-337)は日本の高校教育においては「一連の選択や新しい試みや個人的発見」を通じて「大人として自立し、適応していく」視点が欠如していると指摘したが、そのことは現在でも当てはまるのである。

本稿は「個性化・多様化」の実現のために個人の価値観を尊重することや、教育効果としての学業達成を無視するものではない。批判したかったのは、「十分な事例研究が行われないうまま、改革が先行する現象」(田中 1999, p. 159)である。徹底

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

した「現場の意味理解」(古賀 2004, p. 6)へ目配りがされないまま高校教育の改革はなされるべきではない。

本稿の限界は長期的な教育効果研究として、卒業後の生活・意識への定時制高校の影響や効果まではカバーができていない点が指摘されよう。だが、「夜間定時制高校」の現場の意図はまさにそうした点への影響や効果にある。この点にまで踏み込んで言及するためには、さらに研究の蓄積が必要とされる。また、生徒たちが社会が割りあてた自分の立場や位置づけをどのように捉え、再定義過程においてそれをいかに昇華させていくかについて詳細に分析することも、今後の課題としたい。

〈注〉

- (1) インタビュー内容はインフォーマントの許可を得ることの出来なかった1名を除き、再現性を保障するために、すべてICレコーダーに録音した。さらに録音された語りのデータはすべて逐語的に書き起こした。(ただし、録音が許可されなかった1名に関しても、インタビューの内容をすべて記述によって記録することは認められた。)インタビューデータについては、匿名性を守るために、仮名を用いて表記し、さらに匿名性を保つために、口述体を内容に影響を与えないように変更をしている。
- (2) Y高校、Z高校はともに男女共学である。Y高校は、入学難易度は下位に位置づけられている。Z高校においては、専門学校や短大への進学者もいるが、過半数は4年制大学へ進学する。また夜間定時制高校卒業生、全日制普通科高校卒業生、職員(X, Y, Z高校)にも併行してインタビューを行っている。
- (3) 第14期中央教育審議会答申『新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について』文部省大臣官房政策課, 1991年4月19日(『文部時報5月臨時増刊号』ぎょうせい)。

〈引用文献〉

- 新谷周平 2002, 「ストリートダンサーからフリーターへー進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』第71集, pp. 151-169。
- 藤田英典 1980, 「進路選択のメカニズム」山村健, 天野郁夫編『青年期の進路選択』有斐閣, pp. 105-129。
- 門脇厚司 1992, 「高校における相互悪評評価」門脇厚司・陣内靖彦編『高校教育の社会学ー教育を蝕む〈見えざるメカニズム〉の解明』東信堂, pp. 135-148。

- 苅谷剛彦 1986, 「閉ざされた将来像」『教育社会学研究』第41集, pp. 95-109。
- 1995, 『大衆教育社会のゆくえ—学歴主義と平等神話の戦後史』中央公論社。
- 2001, 『階層化日本と教育危機—不平等再生産から意欲格差社会へ』有進堂高文社。
- 片岡栄美 1983, 「教育機会の拡大と定時制高校の変容」『教育社会学研究』第38集, pp. 158-171。
- 1993, 「戦後社会変動と定時制高校—都市型および農村型定時制高校の変容の比較—」『関東学院大学文学部紀要』68号, pp. 85-121。
- 川野健治・佐藤達哉・友田貴子 1998, 「短大入学時の環境移行：気分の原因帰属を手がかりとしたモデル構築の試み」『発達心理学研究』第9巻第1号, pp. 12-24。
- Kinney, David A., 1993, “From Nerds to Normals: The Recovery of Identity among Adolescents from Middle School to High School”, *Sociology of Education*, Vol. 66, No. 1, pp. 21-40.
- 古賀正義 2004, 「学校現場の知とエスノグラフィーの実践」古賀正義編著『学校のエスノグラフィー—事例研究から見た高校教育の内側』嵯峨野書院, pp. 1-11。
- 宮島 喬 1999, 『文化と不平等—社会的アプローチ』有斐閣。
- 森田京子 2004, 「アイデンティティ・ポリティックスとサバイバル戦略—在日ブラジル人児童のエスノグラフィー」『質的心理学研究』第3号, 新曜社, pp. 6-27。
- Rohlen, Thomas. P, 1983, *Japan's High Schools*, University of California Press, (=1988, 友田泰正訳『日本の高校：成功と代償』サイマル出版会)。
- 志水宏吉 2004, 「低学力克服への戦略—『効果のある学校』論の視点から」苅谷剛彦・志水宏吉編『学力の社会学 調査が示す学力の変化と学習の課題』岩波書店, pp. 217-235。
- 志水宏吉・清水睦美編著 2001, 『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店。
- 竹内 洋 1995a, 「学校効果というトートロジー」竹内 洋・徳岡秀雄編『教育現象の社会学』世界思想社, pp. 2-18。
- 1995b, 『日本のメリトクラシー—構造と心性—』東京大学出版会。
- 田中 葉 1999, 「『総合選択制高校』科目選択制の変容過程に関する実証的研究—

夜間定時制高校生の自己の再定義過程に関する質的研究

自由な科目選択の幻想—」『教育社会学研究』第64集, pp. 143-163。

Willis, Paul E., 1977, *Learning to Labor: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Westmead: Saxon House, (=1985, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども—学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房).

Wallman, Sandra, 1984, *Eight London Households, London*, Tavistock, (=1996, 福井正子訳『家庭の三つの資源』河出書房新社).

<謝辞>

調査にご協力いただいたX高校, Y高校, Z高校の教員の皆様, 生徒の皆様に心から感謝いたします。

ABSTRACT

**Qualitative Research on the Process of Self Redefinition
Among Part-time Evening High School Students:
Using “Organizing Resources” as a Clue**

KIDOKORO, Akiko

(Former student of Graduate School, Ochanomizu University)

Email: acco-k@tbi.t-com.ne.jp

SAKAI, Akira

Ochanomizu University

2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo, 112-8610 Japan

Email: sakai@kodomo.ocha.ac.jp

The aim of this paper is to analyze how part-time evening high school students change the self-definitions which they have once constructed, and also to reconsider from a sociological perspective the educational significance of part-time high schools that contribute to this process of redefinition.

This paper looks at part-time evening high schools, which have generally been overlooked in the recent reforms of high school education. These schools were established after World War II to serve young working people, based on the fundamental ideology of equal educational opportunities. They contributed to the universalization of high school education. However, in recent years the number of such schools has been decreasing. The students absorbed into those schools have been placed as the bottom of the credentialist hierarchy, and have been analyzed as such in sociological studies. However, part-time evening high schools are unique public educational institutions, organized primarily for a diverse variety of working students both in age and in career. Thus, it is very important to investigate the role they play as educational institutions for adolescents and what actual conditions they are in from a sociological perspective. This also leads to a reconsideration of educational reform.

The paper draws the following conclusion: from the narrative of part-time evening high school about how they decided to make a new commitment to their

schools and society, it emerged that they use various resources in the process of re-defining themselves, such as the distribution of time, and identity based on schools, occupations and other human relationships. Information also acts as a resource for them. Therefore, this paper focuses on the organization of resources: time, information, and identity (Sandra Wallman, 1984). Moreover the results of the analysis confirm that after entrance into a part-time evening high school, students gain wider choices in their activities as organizing resources. This is peculiar to part-time evening high schools. Therefore, through their personalities, the motives and sense of value of their own social, educational environments is realized as this paper closely analyzes their narratives as a process of absorbing organizing resources.

At the same time the following two aspects that exist in the institution of part-time evening high school are obtained. First, there is an opportunity for education to get new relations and knowledge. The second and more important finding is that there are possibilities for self re-definitions as unexpected consequences. (1) Many students gain experience working. This makes them to reconsider the "inside" of the school. (2) There is a process of "symbiosis" which is un-artificial at school.

Finally, students need the processes of self redefinitions through various interactions, from which for the first time they can shoulder their 'self-decision' and 'self-responsibility' subjectively. Through its examinations, this paper attempts to present one perspective for reconsidering educational reforms. Accordingly, it is necessary to continue to focus on this issue.